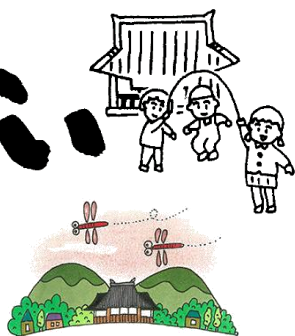


とくわい



2022 年 9 月 16 日 NO.631

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

東海教区朝明組 活動報告

来年、ご本山で親鸞聖人御生誕 850 年と立教開宗 800 年のご法要が厳修されることになりました。ご法要にむけ、全国で「お待ち受け法要」がおつとまりになります。当組でも「お待ち受け法要」の開催にむけて検討し、毎年お勤めしております仏婦連盟主催の降誕会をベースにして組全体で開催することになりました。

本年 5 月 18 日。会場は地域の文化会館、あさけプラザのホールで。婦人会コーラスによる音楽法要「重誓偈作法」を最初におつとめました。ご法話はご本山の連研中央講師でもあります加藤真悟先生より「遠慶宿縁」をテーマに、やさしく力強いお話をいただきました。

アトラクションは朝明組地内にお住まいで音楽活動をされている久保田光太先生をお招きして「みんな花になれ」や「ふるさと」などコーラス隊とのコラボも含め 6 曲演奏して頂きました。懐かしい曲も多く、口ずさんでいる参加者の方も見受けられました。

コロナ下で開催も危ぶまれましたが、座席を半数にするなど感染対策を講じながら、僧侶・門徒スタッフの皆様方と力を合わせてご法要をお勤めすることができました。



朝明組

三重県の
四日市市北部と朝日町、川越町の
およそ30ヶ寺あまりが所属する

Contents

朝明組活動報告	P1
ころもなし	P2
特集	P3
名古屋別院歴史	P4.5
御伝鈔解説	P6.7
お坊さんの書棚／声	P8



『仏願の生起本末を聞く』

杵名 奈都子（愛知県安城市）

仏様と神様の区別もつかず、寺院と神社の違いも知らないままに育った私が、母の葬儀を営むにあたり、まずはどこかのお寺さんを手配するようにと言われて、たまたま出逢ったのが浄土真宗のお寺でした。

そして七日参りの度に勤められる『正信偈』に興味を抱き、そのお寺さんに内容を聞くもまったく要領を得ず…、その後たまたま近所で催されていた「正信偈の勉強会」に参加するご縁に恵まれ、そこでたまたま出会ったのが君代おばあちゃんと竹じいちゃんでした。

ある時、君代おばあちゃんがこんな話をしてくれました。

「母が口癖のように言うていた『仏願の生起本末が腹に落ちるまで聞き抜けよ』という言葉の意味が知りたくて、私はお聴聞をしているのよ」と。

またある時、竹じいちゃんがこんな話をしてくれました。

「わしら姉弟は、親父が死に際に言った『仏願の生起本末がわかるまで死ぬんじゃないぞ』という言葉が気になってお聴聞を始めたんだわ」と。

その頃の私は「ぶつがんのしょうきほんまつ」と言われても、何のことやらサッパリわかりませんでした。でもなぜか、この言葉が胸に突き刺さったまま抜けなくなってしまうんです。



そんなある日、ネット検索で見つけたお寺のご法座に、君代おばあちゃんと二人でお参りさせていただいた時のことです。

法要の後、布教使さんとお話するご縁をいただき、そこで君代おばあちゃんが、

「私は“仏願の生起本末”というものを聞きに来たのに、今日も説明してもらえなんだ…」と言うと、その布教使さんは、

「私は今日も“仏願の生起本末”しかお伝えしておりませんがね～」と仰り、私も君代おばあちゃんもポカ～ンとしたまま帰宅したことが、今は懐かしく思い出されます。

「仏願の生起本末」というのは、毎日地獄行きのタネ撒きばかりしているこの私を往生成仏せしめるために、阿弥陀さまは“南无阿弥陀仏”というお名号になってくださった、その一部始終ということです。

親鸞聖人は、『経』に「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」（『信文類』）とお示しく下さいました。つまり私たちがお聞かせいただくべきは、阿弥陀さまがこの私を必ず救うとお誓いくださり、“南无阿弥陀仏”という御名となってくださったそのおいわれを、疑いの闇が晴れるまでお聞かせ戴くということです。そして、そのおこころのままにお念仏申す身となることが何よりの肝要だとお示しく下さるのです。

それは、「仏願の生起本末」という言葉の意味を聞くということではありません。この言葉の中に無限に広がる阿弥陀さまのおこころをお聞かせ戴くということです。そのおこころに気付かされた時、私の口から自然に「南无阿弥陀仏」と出てくださいます。その阿弥陀さまとお出遇いさせていただく道を親鸞聖人は「浄土真宗」とお示しく下さったのです。

東海教区「公聴会」について

2022(令和4)年度公聴会が各教区およびオンラインにて開催され、東海教区では6月10日(金)の午前、午後の日程での開催となりました。

「宗派で取り組みを進めている『新たにめざす持続可能な宗務組織を構築するための具体策』について、現状報告を行い、情報共有を図る。」という趣旨のもとでの開催でした。

下記のような流れで【報告及び意見聴取】として会が進行しました。

- (1) はじめに(石上総長挨拶)
- (2) 2021年度公聴会の振り返り
- (3) 新たにめざす持続可能な宗務組織を構築するための具体策
- (4) 賦課基準の見直しについて(第2次答申)

議題の中心は、持続可能な宗派組織の運営と賦課基準についてでした。

これに対して、対面およびオンラインで意見を送られた教区内寺院のみなさまのご意見を抜粋してご紹介いたします。

「新たにめざす持続可能な宗務組織を構築するための具体策」について

- ・財政の収支バランス毎年1億7000万、5年間で8億5000万円で、削減は人員規模の対応をされる目標を出しているが、これが財政健全化メインの方策ですか。また、できる見込みがありますか。
- ・収入が減るのは、宗派に限らず、私の寺も同様です。その故は、ニュースで、この20年間の日本の賃金は横這いで、物価は昇っている為です。又、人口減少で10年、20年と経ると兼職寺院が増え、寺じまいも増えていくでしょう。宗派の組織は巨大になりすぎたのであります。収入が減ったからといって、寺にその収入源を求める前に、今までの組織運営では無理だと認識されて、組織の解体・事業縮小・取り止め等をして、収入増に頼ることのない小規模組織にされた方が良いと思います。(一部抜粋)

「賦課基準の見直しについて(第2次答申)」について

- ・現在の護持口数は社会状況に合っていない、廃止変更はわかります。各寺院の収入金額で賦課金徴収方法をとる中で、支出は考慮に入れない。収入だけを基準とするのはおかしい。(一部抜粋)
- ・収入金額は毎年異なり、各寺の収入額の調査はどのようにされるのか。又、調査は毎年行われるのか。
- ・収入源に一定率にて算出とあるが、寺に対するパーセントはどのように決められるのか。収入項目によりパーセントは異なってくるのか。

※教区内の意見の全文は10月31日までの間、
右記のQRコードからご覧いただけます。



～名古屋別院歴史～三法要を迎えるにあたって

このたび、2024 年に「本願寺名古屋別院親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要、本願寺名古屋別院本堂復興 50 周年記念法要」の【三法要】をお迎えすることになりました。そこで、30 周年・40 周年の法要に深く関わった方に印象に残るお話を聞かせていただきました。

人は気温が 28℃を超えると暑いと感じ、23℃～27℃でちょうど良いと感じるようだ。

10 年前の記念法要は、名古屋の最高気温が初日 27.3℃、二日目は 27.7℃だったという。しかし、もっと暑かったと思う。

本堂再建後、記念法要は必ず 10 月に『ご親修』されてきた。涼しい季節なので、ご門主様の控室は再建当時のままエアコンが設置されていなかった。

「そろそろ設置したら？」という声もあったが、過去の経緯から「大丈夫」と今回も保留した。

一向に涼しくならないまま、法要 2 日前に 30.5℃を記録する。見通しの甘さを悔やむが、エアコンはもう間に合わない。何とかしないとイケない。

法要前日、新門様のお出迎えのために名古屋駅へ。その待ち時間、冷風機を求め駅裏の家電量販店に。しかし、時季的にもう店頭から消えており、バックヤードに在庫もなかった。手分けして他店に問い合わせるがどこにもない。もう時間がない。

「どうする！」

ところが、一夜明け空気は一変した。空は曇り、肌寒い。これなら冷風機は必要ないと思った。2 日目のことを考え、レンタルの問い合わせもするが、気温以外の問題が立て続けに発生し、対応に時間を奪われていった。昼過ぎに「新門様は何もおっしゃいませんが、控室の暑さ何とかありませんか？」と、随員から要請が入った。いつの間にか気温が上がっていることに気づいた。手分けして、最優先で冷風機を捜す。程なく、借用可能な寺院が見つかり、職員が受け取りに急行した。間もなく「控室に 2 台搬入された」と報告が入り、ひとまず安心した。

夕刻のレセプション終了後、お帰りの新幹線を待つ僅かな時間、新門様が我々に歩み寄られ、ねぎらいの言葉をおかけ下さった。咄嗟に、控室の不備をお詫び申し上げると、むしろ涼しく快適だったと、謝辞まで頂戴し甚だ恐縮したが、同時に安堵した。

しかし翌日の夕刻、控室係だった方に「初日は冷風機の操作方法が解らず、送風機能しか使えず、ぬるい風が出ていた」と聞かされ絶句した。

思い返せば、只々畏れ多いことでしたが、この一件で新門様のお人柄に触れ、敬服の念を一層深めたことを申し添えます。



朝明組善養寺住職
渡邊（半田）真壽



私は昭和 61 年から約 5 年間の京都教務所勤務の後に転勤、名古屋別院に勤務した期間は平成 4 年 3 月～平成 25 年 3 月までの 21 年間でした。

21 年の中で、記憶に残る出来事は教区主催・別院主催の様々なご法要の勤修ですが、特に記憶に残るのは、蓮如上人 500 回遠忌法要「東海教区お待ち受け法要」です。

このご法要は、これまでのような別院本堂では無く、福井の吉崎御坊があった跡地・千歳山（通称：お山）の蓮如上人像の前でお勤めした野外法要でした。

愛知県三重県の教区内各地より 30 台以上の観光バスで吉崎に集い、1400 名の参詣者と共に声高らかに正信偈をお勤めした事がとても印象深い思い出です。北陸は「弁当忘れても傘忘れるな」と言われるくらい天気が変わりやすい地域。そこで野外法要をするというのですから、天候次第で法要自体も、参詣された方の感想も大きく変わる行事でしたが、有難いことに当日の天候は、北陸でもまれに見る快晴。参詣者を前に、当時の藤下恒庸輪番の挨拶の第一声が「晴れて良かったな！」だったことは忘れることができません。

蓮如上人 500 回遠忌法要を、従来通りの名古屋別院ではなく蓮如上人ゆかりの地でお勤めできたことは、非常に印象に残りました。

この度お勤めされる三法要が一人でも多くの方にお念仏と出会えた喜びを感じてもらえるものになることを願っています。



桑名組安養寺住職
安藤昭丸

四洲教区教務所長
本願寺塩屋・高知別院輪番
東海教区三重組法林寺住職
羽川俊裕



このたび、「本願寺名古屋別院三法要」をお迎えするにあたりまして、別院復興 30 周年法要の記念冊子を久しぶりに見返してみますと、本堂が参拝者で満堂になり、入りきれない参拝者の方が廊下にまであふれていた様子を思い起こしました。今のコロナ下では考えられないことです。

皆さんと一緒に正信偈をご唱和したり、仏教讃歌を合唱していたなんて、今のコロナ下からすると、まるで夢のような出来事であったと、時代の流れを痛感しております。

そのような中、今日でも色あせないのが、本堂内陣の極彩色の荘厳です。遠くから作業にいらっしやった職人さんが朝早くから夜遅くまで何日も泊まり込みで作業をしていただきました。そのおかげで、今でも 20 年前の当時と変わらず、華やかに輝いており、お浄土の様子を感じることができるのではないのでしょうか。これからも光り輝き、参拝される方の心も穏やかにされていくことでしょう。

教区内のご寺院様、門信徒様をはじめ、有縁の皆さまのご協力をいただき、復興 30 周年記念法要が盛大にお勤まりになったことを改めてありがたいことであったと思い起こさせていただきます。

最後に、このたびの三法要が多くの方のご協力によって修行され、名古屋別院が東海教区の皆さまの心の拠りどころとして末永く相続されていくことを念じ上げております。

御伝鈔・御絵伝から見る親鸞聖人の御生涯

来る2023（令和5）年に宗祖親鸞聖人の御誕生850年、さらにその翌年には立教開宗800年を迎えます。親鸞聖人は、平安時代の末、承安3年（1173年）に京都の日野の里でご誕生になられました。また立教開宗の年は、親鸞聖人ご執筆の『教行証文類』化身土巻に記された元仁元年（1224年）としています。

浄土真宗において立教開宗とは、親鸞聖人が師の法然聖人より相承された阿弥陀如来の浄土教の真意を体系立てて説き示してくださったことを表します。それは煩惱に惑いながら苦悩の人生を生きる私たち一人ひとりに、南無阿弥陀仏のお念仏となって至り届いて、まことの安心を与えようと願われた、阿弥陀如来のご本願の教法でした。

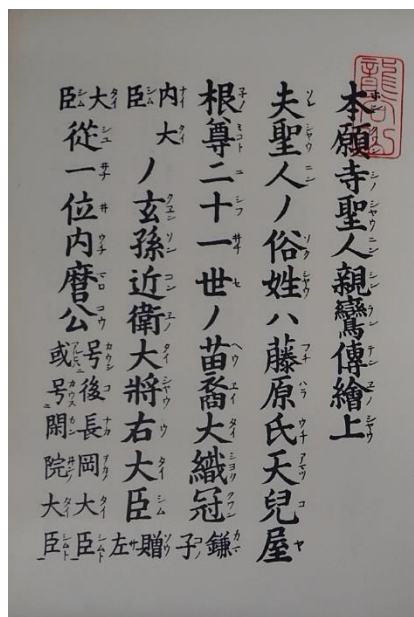
宗門は、2023年に浄土真宗のみ教えをお示してくださった宗祖への感謝と私たちが今、その教えに出遇えていることの喜びから、ご誕生と立教開宗の慶讃法要を勤修します。

教区報『とうかい』では、親鸞聖人の記念法要を迎えるにあたり、東海教区の布教使による、宗祖のご生涯が記された伝記『御伝鈔』の解説を今号より連載いたします。『御伝鈔』とは、本願寺第三代覚如上人が、父の覚恵上人や画家の浄賀法眼氏らと共に関東の親鸞聖人ご遺跡を巡拝され、ご門弟からお聞きになった聖人の行跡を宗祖のご生涯として詞書にしたためられたものです。当初は、文章と絵が交互に配置された絵巻物として制作されました。しかし以後、寺院に参集する大勢の門徒が絵巻物を鑑賞できるよう、絵と詞書（ことばがき）が切り離され、絵だけを集めた『御絵伝』は掛軸にして参拝者に見てもらい、詞書を集めた『御伝鈔』は絵の前で声に出して読み上げるようになりました。親鸞聖人の報恩講の際、ご本山や一般寺院では、余間に『御絵伝』を奉懸して『御伝鈔』の拝読がされています。

『御伝鈔』を通して親鸞聖人のご生涯に触れることで、宗祖のご誕生と立教開宗をしてくださったことへの謝恩を深めていければと思います。



御絵伝（本願寺名古屋別院蔵）



御伝鈔上巻

第一幅 第一段「出家学道」

親鸞聖人は承安3（1173）年5月21日（旧暦4月1日）日野の里（現在の京都市伏見区）でお生まれになりました。父は日野有範という方で皇太后宮権大進の役職についていました。母については清和源氏の流れをくむ人では無いかと伝えられていますが諸説あります。また、日野家は藤原氏に属する中流貴族であったと伝えられています。

さて、今回は御絵伝第一幅第一段「出家学道」についてです。第一幅は『御伝鈔』上巻の第一段「出家学道」、第二段「吉水入室」、第三段「六角夢想」、第四段「蓮位夢想」まで五つの図で下から上に向かって描かれています。「出家学道」は下から第一図と第二図の二つの図に分けて描かれています。

御絵伝の始まりである第一図は養和元（1181）年の春頃、親鸞聖人が数え年9歳で伯父であり養父の従三位日野範綱卿にとまなわれ青蓮院の慈円慈鎮和尚のもとを訪ねて行かれたと伝えられている場面です。季節が春であることを表わす桜や親鸞聖人が貴族であることを表わす御所車、お供の侍や護衛・稚児等が描かれています。



次に第二図です。第二図には二つの場面が描かれています。一つ目は慈円慈鎮和尚と日野範綱卿、親鸞聖人が対面されています。『御伝鈔』には直接記述されているわけではありませんが、このようなエピソードが伝えられています。この日はもう夕暮れ時だったそうです。そこで慈円慈鎮和尚は「もう日が暮れます。お得度は明日なされるのが良いでしょう。」と仰せられます。しかし親鸞聖人は懷紙に「明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは」と一首歌われます。この歌のお心は「満開の桜。明日見よう。そう思っている、夜半に思わぬ嵐が吹いたならばもう満開の桜を見ることはできない。」と私たちのいのちについて歌われているのです。今、この瞬間は生きている。しかし、次の瞬間には生きているかどうか分からない。だからこそ、明日では無く今ここでお得度を受けさせて頂きたい。そんないのちの儚さを歌われたのがこの歌なのでは無いでしょうか。そうして親鸞聖人はこの時にお得度をお受けになりました。現代の9歳ではあまり、いのちの儚さについて考えたり感じたりすることは無いのかもしれませんが、しかし、親鸞聖人の幼少期には国内で戦乱や自然災害、飢饉などが起こり日頃から死ということを意識せざるを得ない状況であったと思われます。何時終わってしまうのかわからないいのちだからこそ、いのちの行く末を仏教に求められたのでありましょう。

次の場面は親鸞聖人がお得度を受けられる場面です。日が暮れてからであるということを表わすために蠟燭が描かれています。ちなみに浄土真宗本願寺派ではこの時の親鸞聖人に習い現在でも本山の閉門後薄明かりの中で得度式が執り行われています。その後僧侶となられた親鸞聖人は範宴と名乗られ比叡山において20年間勉強修行に励まれるのです。

大竹章和（桑名組聞光寺）

『サンマデモクラシー』

(本文より) そして僕は玉城ウシの起こした「サンマ裁判」の顛末を追いかけて取材に走り回っているうちに、想像を超えたビッグウェーブに巻き込まれていき、沖縄の歴史の奥底に沈んでいた驚きの新事実を次々とサルベージしていくことになった。

この本は、返還前の沖縄で当時輸入品であったサンマにかけられた「関税」が「不当な徴収であるから、返金・還付せよ」と、アメリカ統治下にあった沖縄政府を相手に起こした「サンマ裁判」を追ったドキュメンタリーです。私たちの知らなかった事実を歴史の底からサルベージ（引き揚げ）してくれた一冊です。

著：山里孫存 発行：イースト・プレス

魚卸業の「玉城ウシ」おばあを中心にお話は進みますが、その裁判がきっかけとなり、やがては祖国復帰運動の高まりへとつながっていきます。沖縄の人々の統治への思い、返還に向けての民主主義の大きなうねりなどが書かれ、読みごたえのある本です。今年に沖縄本土復帰 50 周年の節目にあたります。ご一読いかがでしょうか。

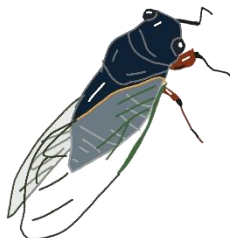


～声（読者のページ）～

『大事なことを』を学ぶ

夏休みのことです。郵便局からの帰り道、近所の保育園の子たちが先生とお散歩しているところに出逢いました。「おはようございます!」「おはようございます。暑いねえ」と言葉を交わします。立ち止まって木を見上げているその先に「せんせい、せみのぬけがらだよ!」「ほんとうだね、セミもついでだよ、ほら、あっちの枝だよ。」「みてみて! ほら、いるよ」子どもらが私にも教えてくれます。

そこへ、ご年配の女性が通りかかりました。「あら、こんなところにセミが転がっているねえ」アスファルトの道路にぽつんというセミに、子どもたちの興味が移りました。女性が続けます。



「このままだと、セミさん、車にひかれてしまうねえ」それを聞いた私は咄嗟にそのセミをつまみました。だいぶ弱って、手のひらに置いてもほとんど動きません。子どもたちが「みせて!」「みせて!」とわらわらと寄ってきて、子どもと大人で「まだ生きてるよ」「こういうときは、土の上のほうがいいかもねえ」と考えて、他のセミたちがいる木の根元に、そっと置いておくことになりました。

「セミさん死んじゃうの?」「元気ないね」まだしばらく観察が続く様子です。こうやって「大事にする」とはどういうことを身体で学んでいくんだなあ、と思いながら、その場を離れた、夏の一コマでした。